

「航空発祥の歴史をたずねて」

2021年2月25日 記 安田 好子

*実施日 2021年2月18日

*場 所 所沢航空記念公園

*参加者 倶楽部会員 16名

野老澤の歴史をたのしむ会 18名 (コンシェルジュ1名含む)

コンシェルジュ 2名

はじめに

2020年春から新型コロナウイルス感染症が発症し今年もコロナ感染拡大が収まらず、2度にわたって非常事態宣言が出され現在も非常事態宣言中です。各サークルは中止、延期、リモートなどを用いて変則的なサークル活動を行っている状態です。

野老澤の歴史をたのしむ会は屋外活動が多いので倶楽部会員が参加出来る合同活動を実施してほしいと理事会からの要請を受けて企画した活動です。何分準備時間が短く不行き届きが多々あったことと思えます。

1. 航空発祥 100周年記念碑

所沢航空発祥 100周年を記念し、所沢航空資料調査収集する会より設置された記念碑です。

大正8年(1919)フォール大佐一行のべ63人が来日し、航空技術の指導を行いました。2019年4月フランスから子孫の7人、日本の子孫2人其のうちの一人は松本零士氏他大使館員、政界、市民が集い100周年のセレモニーが催されました。

2. 滑走路跡

当時日本政府は航空機が欧米において急速に発展している事に刺激され、明治42年7月に「臨時軍用気球研究会」を発足し、飛行場の建設、飛行機の購入、飛行機を操縦する人の養成を決め、また徳川好敏大尉、日野熊蔵大尉をフランスとドイツに派遣しました。二人はアンリ・ファルマン等4機を購入し操縦訓練を受けて帰国しました。

一方飛行場の建設場所は①落雷が少ない事②地形がなだらかで起伏が少ない事③高圧線がない事④鉄道の便が良く、陸軍本部に近い事等により所沢が選ばれました。

そして明治44年4月1日に日本で初めてはば50m、長さ400mの滑走路が建設されました。現在の時計塔あたりまでありました。

明治44年4月5日徳川大尉がフランスから輸入したアンリ・ファルマン機により高度10m、距離800m、飛行時間1分20秒の飛行を記録し、日本で初めて飛行場での飛行に成功しました。(因みに日本で一番最初の飛行は明治43年12月19日徳川大尉による代々木練兵場における飛行が最初です。)



航空発祥 100 周年記念碑



滑走路跡

3、大正天皇駐輦の碑（ちゅうれん）

輦車とは天皇や皇室の方が乗るのりものです。

大正元年 11 月 17 日に大正天皇が所沢飛行場に行幸され、飛行機の飛行を統監されたのを記念して建立された碑です。碑は当時、大正天皇に参加を推進した井上幾太郎大将の筆による字が刻まれており、価値ある碑とされています。

当時は天皇が所沢に行幸されると言うことで、市内は大変な賑わいになったとのこととです。

4、フォール大佐胸像

第一次世界大戦後の大正 7 年、フランス国に日本の航空技術者の教育訓練を要請しました。フランスは第一次世界大戦の同盟国である日本の要請に対して全額フランス政府が負担することで、フォール大佐を団長とする技術者のべ 63 名の専門家を大正 8 年 1 月から 1 年 7 カ月間の間派遣してくださいました。

日本の飛行場等に滞在し、陸軍の将校や技術者に学科と飛行訓練を教えました。また生活面においても貢献し、西洋料亭や飲食店が開業し所沢の町にも活気を与えました。

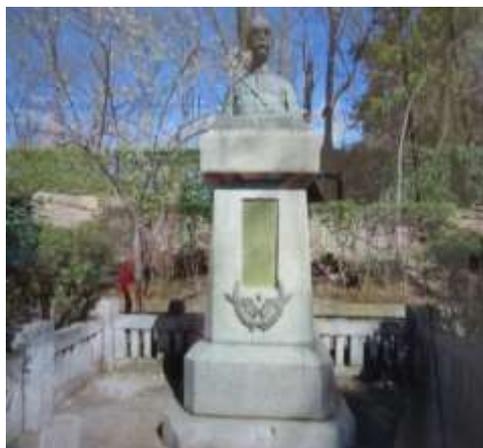
日本でのフォール大佐の業績は大きく「日本航空の父」と呼ばれ大佐の功労を湛え、昭和 3 年 4 月に所沢飛行学校の校庭にフォール大佐の銅像を建てました。

しかし、昭和 20 年の終戦後取り外されて所在不明となり、残された原型（金沢市の水野 明氏製作）を基に多くの関係者の努力により昭和 57 年に復元し建てられました。

フォール大佐の胸像の下のパネルには当時来日したフランス人の名前が刻まれています。



駐輦之碑



フォール大佐胸像

5、木村・徳田両中尉記念塔（追悼の慰霊碑）

この像は大正2年3月28日、東京青山練兵場で行われた陸軍省の観覧飛行会に所沢飛行場から参加した「ブレリオ機」が午前11時36分木村鈴四朗歩兵中尉（当時28才）が操縦し徳田金一步兵中尉（当時29才）が同乗して所沢飛行場帰路の途中、午前11時59分に所沢飛行場を目前に、突然の強風にあおられ左の翼を破壊され、高度300m上空からきりもみ状態で牛沼の山林（現在の聖地霊園駐車場南側）に墜落し、両中尉は機体と共に殉職し、我が国最初の航空事故犠牲者となりました。

墜落の一年後の3月28日に二人の英霊を慰めるため、「やまと新聞社」が中心となり所沢町と松井村の在郷軍人会、青年会の協力を得て義援金を募り墜落地点に二人の英姿の銅像の記念塔を建てました。

その後、現地は交通の便が悪く訪れる人が少ないので在郷軍人会が発起人となり昭和4年3月に所沢駅前に移設しました。が、終戦後の昭和27年に所沢の駅前の整備に伴って西武園遊園地に移され、昭和40年に航空自衛隊入間基地内と転々と移された後昭和55年3月に両中尉が生前飛びたつた地であるこの地に設置されました。

なお、墜落地点には「木村・徳田両中尉殉職之處」と刻まれた記念碑が建てられています。

6、少年飛行兵の像（別名：健児の塔）

この像は昭和18年彫刻家故長沼孝三氏が「翼を抱き、空を見上げる少年飛行兵3人の姿は操縦、通信、整備の協力によって飛行機が飛行すること」を彫刻して第2回大東亜戦争美術展に出品し一年後の昭和19年5月21日に建空神社参道（所沢航空整備学校内）の地に建立されたもので、当時の少年飛行兵や整備兵達のシンボルとして崇拝されていたということです。

戦後、米軍基地に接収され、昭和46年の一部基地返還に伴い公園内に整備されましたが長年の風雨により傷みが激しかったが財政難によりそのまま放置されていました。

平成9年2月所沢航空資料調査収集する会がこの像を保存しようと協力者を募り、長沼孝三彫塑館（山形県長井市）の協力で修復工事を行い平成17年11月台座を新設し今の場所に設置しました。

現在では建空神社は鳥居の後が僅かに残っているのみです。



木村・徳田両中尉記念塔



少年飛行兵

7, C-46A機

アメリカのカーチス・ライト社が1940年3月から総数3180機を製造しました。当初は軍用輸送機として使用されていましたが、戦後多くは民間旅客機として使用されていました。

日本では昭和30年1月に航空自衛隊の輸送機としてC-46D型を、昭和34年12月にC-46A型機を輸入して47機保有していました。航空自衛隊では災害時の緊急物資の空輸、空挺隊訓練、兵員輸送等幅広く活躍しました。

ここに展示してありますC-46A型機は、入間基地で使用されていたものを昭和55年12月に航空自衛隊より貸与されて設置されたもので公園のシンボルとして訪れる人の目に留まっています。

8, 航空発祥記念碑

所沢は明治44年4月1日、日本初の航空機専用の飛行場が開設され、同年4月5日徳川好敏大尉が操縦するフランス製アンリ・ファルマン機により高度10m、飛行距離800m、飛行滞空時間1分20秒の飛行を行いました。これが日本で初めての飛行場での飛行に成功した場所として「日本の航空発祥の地」と呼ばれています。

この碑は所沢市と所沢航空資料調査収集する会によって建設された石碑です。





2 班



3 班

